

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】徐 亦猛

【所属】(助成決定時)関西学院大学大学院神学研究科

【研究題目】中国の農村におけるキリスト教の受容に関する研究
—浙江省寧波市奉化県を中心に—

【研究の目的】

現代の中国農村において経済、政治の成長と共に、宗教(特にキリスト教)の広がりが非常に著しい。宗教は、古くから中国伝統社会においてすでに深く根付き、特に農村地方において宗教という極めて重要な役割を看過できない。歴史的或いは現代社会的な側面を検証しても、中国の農民は中国伝統文化と民間信仰の典型的な代表である。しかし、問題になっているのは、現代の中国の農村において、非常に農民の間に浸透しているのは、儒教、道教、仏教などといった中国の伝統的な民間信仰ではなく、西洋文化の根源であるキリスト教である。キリスト教は外来の宗教としてのイデオロギーは、中国農村の伝統的な民間信仰、道德規範、既に形成されていたライフスタイル、及び農村部の本来の文化構造に深刻な影響と衝撃を与えたのは、間違いない。1970年代末から始まった「改革開放」以来、「洋教」と呼ばれるキリスト教は中国の農村において盛んに成長しているのか。その原因は何であるか。中国の農村の信仰状況は何であるか。本研究は、歴史的、社会学、宗教学的な観点から、浙江省寧波市奉化県において現地調査を行い、上記の問題点について包括的に考察し、解明すると同時に、今後の中国の農村におけるキリスト教のありかたを探ることを目的とする。

【研究の内容・方法】

研究者は中国の研究者が深く研究していなかった神学及び現地教会活動の視点と、そして欧米研究者と異なる中国人の視点を合わせて、中国の浙江省寧波市奉化の管轄する一つのY村落において現地調査を行い、その調査から得られる一次資料とデータを駆使し、理論的分析を通して、総合的に中国の農村におけるキリスト教受容の状況を把握することを目指した。

改革開放以後、経済の高度成長によって、中国の農村社会は大きな社会的変革を迎えた中、伝統的な民間信仰の衰退によって、農村の民衆は心と精神の不安に陥り、次第にキリスト教に目を向け、キリスト教が従来の伝統的民間信仰における社会的機能を果たし始めてきた。三〇〇〇人ぐらいの人口をもつY村は八〇年代後半、福建省から村に嫁いできた一人の女性によってキリスト教が芽生え始め、九〇年代後半においては発展のピークを迎え、現在、全村のキリスト者人口は約八〇〇人ぐらいである。彼らは定期的に集会に参加し、最初は個人の家で礼拝をしていたが、現在では信者の献金によって礼拝堂が建てられ、正式な集会は週一回で日曜日に行われている。村の信者は伝統的な村の人間関係を利用し、積極的に伝道活動を推進してきており、礼拝の参加者の半数以上は、親戚や友人の勧めによって来たのである。

助成期間中、現地調査のフィールドワークを行って、村に住み込み、村の住民と信頼関係を築き、観察、インタビュー、活動参加という伝統的な研究方法を通して、キリスト教信仰をもつ住民たちの日常生活とキリスト教礼拝活動を綿密に記録した。その調査から得られる一次資料とデータのもとに、Y村のキリスト者人口の性別、年齢及び教育の実態を分析した。それと同時に、農村におけるキリスト教が果たした社会的機能及びキリスト教受容の問題点についての考察を行った。

研究成果として、(日本基督教学会編「中国の農村における宗教の受容に関する研究—キリスト教を中心に」『日本の神学』、第51号、122-143頁)に反映されている。

【結論・考察】

以上の考察を通して、中国の農村におけるキリスト教が急速に成長したその背景には、農民の精神生活に深刻な空白部分があり、キリスト教がそのような空白部分を埋める役割を果たしたこと、さらに、キリスト教は農民の乏しい文化生活を活性化し、信徒同士が相互交流する公共空間を創出し、助け合いによる精神的な支えと基本的な生活保障を提供したことなどの要因が挙げられる。様々の社会変革や経済の高度な発展によって、都市部と違い、農民は社会の一番底辺に取り残され、農民の切実な公共文化と社会保障の需要から見れば、彼らは国家体制の中から正式な資源と支援を全く受けられない社会の負け組になったと言える。このような乏しい気持ちを支えるのは、地元の村政府ではなく、キリスト教の教えと家庭的な雰囲気教会生活である。農村に欠けている社会的機能の空白をキリスト教が埋めてきたので、より多くの成長の空間を得られたと言えるのである。

しかし、多神教の宗教観念を持ち、実用主義と功利性を重んじる中国の農民にとって、キリスト教が伝統の民間信仰に代わって社会的機能を発揮したからこそ、キリスト教に入信するきっかけとなった。キリスト教は農村社会に定着するために、民間信仰の影響を受けつつ、民間信仰から信徒を獲得しなければならないという大きなジレンマに直面している。農民である大多数の信徒はキリスト教の集会と儀式について興味をもつが、キリスト教の本質と教義、教理についてほとんど理解していない。農村部の信徒にとって、キリスト教は生活の一部に過ぎない。一部の農民信徒は個人の実用主義と功利性の目的を達成するため、依然として多神崇拝を行っている。それはキリスト教が中国の農村部に浸透する際に、現地の民間信仰と融合するあまり、本質の一部を失った結果とも言えるであろう。これから、キリスト教が如何に本質を失わず、農村の民衆に健全な宗教的役割を果たすのかが大きな課題になる。